

一闡提であるということである。彼の空思想からすれば、凡夫も一闡提もそれ自身は固定的なものではなく、その性格の中にそれ自身を否定する要素を同時にそなえているということになる。ここに頓悟成仏または一闡提成仏の説が成立する根拠がある。それが現実にある生死の凡夫に対する妙存の思想となり、肯定的な人間観となるのである。この点に、道生は僧肇とは対照的な宗教性をもち得たのであり、そしてそれが仏教の中国化ということなのである。

シェリングにおける同一性について

『ブルーノー』をめぐって

堀尾 孟

シェリングの思想の中で、特にその前半の要となつてゐるのは、同一性 (Identität) についての思想である。これについての従来の解釈は、「すべての牛を黒くしてしまう暗」(ハーゲル) という言葉で代表されるものが支配的である。つまり同一性の世界は、見るもの見られるもの一切が、永遠という神の中に沈み込んでいて、どこにも真に具体的な人間は居ないという、所謂無世界論の解釈である。又現代では、実存的立場から、後期シェリングの所謂積極哲学が中心に解釈され、そこに於ける現存在 (Existenz) の概念が大きく抽出される傾向にある。しかしそれだけに又同一性における個 (Einzelnes) の問題は、永遠の暗に永遠に

沈み込んでしまう傾向にあると言える。そこで、今の問題としてその沈み込みが一体如何様であるかを、『ブルーノー』(一八〇二年) について一考してみようとするのである。

周知の如く、シェリングはフイヒテの「自我が一切である」という立場に対して、「一切が自我である」という所謂客観的観念論の立場をとるのであるが、今問題とする『ブルーノー』は、絶対的同一性を場として、主観と客観の関わりを論じたものである。それは観念根拠 (Idealgrund) と实在根拠 (Realgrund) の統一の問題として提示され、直観と思惟との統一として把握されている。つまりここで言う直観は、存在論的にみられたものであり、有限者 (das Endliche)、實在的なもの (das Reale)、個別的存在を表わす語であり、自然的原理 (das natürliche Princip) という方向で考えられる。それに対して思惟は、概念、或は神学的原理 (das göttliche Princip) として、その有限者、實在的なものに対する無限者 (das Unendliche)、観念的なもの (das Ideale) の立場を表わしている。そしてこの両者が絶対者 (das Absolute)、シェリングにおいては理性の場を表わす語であるが、その絶対者において統一 (Einheit) を有するのである。

さてこの實在的なもの (以下直観の場をこの語で表わす) は、「これ」とか「あれ」という個 (einzel, individuell) にある方向で考えられ、それがそのように現実^{エグゼシステンツ}に有るものとして個有性をもってはいるが、ただそれだけでは、バラバラで「何である」という、真の個有性をもってはいない。故にものが有るといふ場合には必ず形相^{フォルム}、つまり概念が結びついてある。しかしこの概念

というのは、存在と同じ意味で有るヘイネケイレーとは言い得ず、その意味で観念的であり、有限な個物を無限の場で統一している無限者である。この統一としての無限者、つまり思惟は、差別の場において成立する実在的なものとの関係 (Beziehung) において、つまり差別の場に対する統一として、相対的統一 (relative Einheit) である。観念的なものは、実在的なもの統一であると同時に、観念的なものとして実在的なものに対立した (entgegensetzen) 統一である。ここに統一としての観念的なものと、差別 (Differenz) としての実在的なものとの対立が生ずる。しかし一般に対立が対立として成立する限りにおいては、そこに何らかの意味で統一がなければならぬが、この場合の差別と統一との対立を統一しているもの、その基底となっているものは、最早対立に対する統一であってはならないはずである。その統一は、その場でその統一に対する一切の対立が如何なる意味においても成立し得ないような、絶対的統一 (absolute Einheit) でなくてはならない。換言すると、相対的統一としての観念的なものと、差別としての実在的なものとの対立が、そのまま端的に対立 (schlechthin Entgegensetzung) として成立し得るような場としての統一である。つまり実在的なものと、観念的なものとの対立が直接的 (unmittelbar) な対立であるということにおいて、絶対的統一は正に絶対的として成立するのである。いわば、鏡に映された映像とその原像との如き対立が成立し得るその場における、映像と原像との非分離的な (ungesont) 統一、それが絶対的な絶対的統一なのである。このことは逆に言うと、実在的なものが正に

実在的なものとして有るがままに純粹に成立し、観念的なものが観念的として純粹に成立する、その各々の直下に見られた統一ということである。ここにシェリングのフィヒテに対する優位があると同時に、同一性の問題性もあるのである。

実在的なものと観念的なものがこのように、その対立を止揚 (aufheben) せず留めた (bleiben) ヘゲル (Hegel: Differenz des Fichte'schen und Schelling'schen Systems der Philosophie, S. 77) 両者が絶対的無差別における絶対的同等性として成立する、それが両者の実在的な (reell) 場である。このことは絶対者が両者の中に全く同等な仕方 (Gleichweise) で端的 (schlechthin) に自己を表出する (ausdrücken) ことである。この絶対者の表出、或は流出 (Ausfluß) とも生産 (Hervorbringen) とも又開示 (Offenbarung) とも言われるが、この表出はそのまま、実在的なものと観念的なものとの側から言えば、両者が絶対者から分離する (absondern) ことであり、両者相互の関係から言えば端的な対立がそこに成立する、つまり両者の分裂 (Trennung) が成立するということである。実在的なものと観念的なものとの分裂の行為そのものは端的に理性的であるが、両者が分裂において見られる限り、それは悟性の場であり、従って概念は無差別を差別に為す光 (Licht) と呼ばれる。絶対者の表出が、両対立者の分離であり分裂であるということ、表出、分離、分裂が端的に成立しているこのような場の実在的なものは、端的に絶対者としてあり、それ故に又観念的なものとも端的に同等である。このような実在的なものがあり方が an sich なあ

り方である。しかしこのようなあり方は、只統一の中に有るだけで、絶対者からの分離が完全に成立しているとは言いがたい。そのあり方はいわば、個々バラバラなもの一つとして端的に絶対者そのものであると言った、無自覚的なものである。絶対者の死の表現 (ein toder Ausdruch) としての死せる自然と言える。それ故實在なものが實在であるためには、正に自己が端的に絶対者としてであるという、絶対者との絶対的同等性の自覚が必要となる。このことは観念的なものとの分裂の自覚と一つである。何故なら、先述したように、分裂がそのまま絶対的統一であり、絶対的統一がそのまま分裂であるからである。

このような自覚の具体的な現われ方は、自己の中に可能性として無自覚的に含まれていた無限な他のものの無限な現実性を、自覚的に自己のものとしていくこと、つまり有機的 (organisch) になっていくことである。これは一面から言うと可能性の現実化として時間の成立することであり、他面から言うと、鉄と磁石の如く、等しいものが互いに結合する (zusammenhängen) ように、他のものとの本質上の同等性を自覚していくことである。つまり観念的なものに無限に等しくなるよう努める (sich bestreben) ことである。従ってこの場に成立する實在的なものは、観念的なものとの分裂においてみられた für sich なあり方をしていと言える。an sich から für sich への移行行きが、絶対者との端的な結びつきを基とした同等性 (Gleichheit) の自覚として、結合ということと考えられることは、ヘーゲルとの大きな相異である。このようにして分裂は分裂として自覚的に成立するのである

が、それはいわば、第一次元としての光から必然的に成立する平面的な両者の関係であり、そこに求められるのは、差別に対する限りでの統一、先に述べた相対的統一である。従って平面的対立関係にある両者は、互いに制限し合い、制限し合うことによって互いが個々の純粋性を曇らされてあるもの (Gerübsen) となる。故に實在なものはその場合、自己そのものの中で純粋な個性を有するのではなく、いわば結果が原因に關係してはじめて結果として成立するように、観念的なものに關係してのみ存立しているにすぎない。絶対者の立場 (即ち實在的には) から言えば、両者が悟性知反省 (Reflex) によってつくり出された分裂において、つまり観念的 (ideell) な場においてあるにすぎないものである。しかし分裂が観念的だとは言っても、悟性が好き勝手に作り出したものでは勿論無く、悟性がその無限性を場としている限り、つまり悟性が悟性である限り、どうしても超えられぬ分裂なのである。何故なら先述の如く、この分裂は端的なものであつて、絶対者においてのみ、分裂のままに絶対的に統一され得るからである。シェリングがこの分裂を永遠に (ewig) して必然的 (notwendig) だと言うのも、このような理由に基づいている。

それでは如何にしてこの対立が超えられるかというところ、この分裂が正に端的だということの自覚においてである。この自覚は単に分裂の自覚ではなく、それが端的だということの自覚であるから、絶対者との端的な結びつきの自覚 (絶対的認識、或は絶対的直観) である。時間的には先に述べた個の有機的あり方が無限に極まり、その可能性と現実性とが絶対的に一つになること、つま

り観念的なものとの絶対的同等性として、実在的なものが成立して来るといふことである。他面から言えば曇らされてあつたものが、各々の場において透明に (durchsichtig) なるといふことである。簡単に言えば絶対的な無差別 (Indifferenz) の場がそこに全面的に開かれるといふことである。無差別と言っても、それはもの的に考えられてはならない。先述した如く両者は混合、或は止揚されてあるのではないからである。むしろ実在的なものはその場 (自己そのものの場) で真の個有性を有し、従つて観念的なものも同時にそうなるといふこと、換言すれば、für sich を通つて an sich に帰した an und für sich なあり方を各々が各々の場で行っているのである。しかしここで移り行きの基礎も同等性といふことである。つまり実在的なものの徹底純化とは、それが自己の真の本性 (Natur) に帰るといふことであるが、その本性とは絶対者以外の何ものでもなく、従つてそれは絶対者の開示といふことである。又絶対者はそこにおいて、一切の対立が対立のままに端的に一である当の場であるから、その開示として成立する an und für sich な実在的なものは、観念的なものと、絶対的同等性を有せる当体において、観念的なものに永遠に端的に對立し、それと分裂したものであり、それ故に真に個有性をもつたものとして成立する (existieren) のである。従つて an und für sich なあり方とは、実在的なものが悟性の場からしては無となつて有ることであり、理性の場では、一切の根本という意味での第一のもの (das Erste) が第三のもの (das Dritte) として開示しているあり方と言へる。このような自覚が絶対的認識とか、絶対知、或は

erbrücken とか intellektuell anschauen と呼ばれる行為であり、この行為そのものとして一つになつて、と言ふよりはこの行為そのものが絶対自我性 (absolute Ichheit) の sein と言われるのである。いわば神における自然 (die Natur in Gott)、自然における神 (Gott in der Natur) を見る絶対的同一性 (absolute Identität) がここに成立するのである。実在的なものが真に (wahrhaft) 実在的なものであるそのことにおいて、観念的なものは観念的なものであり、絶対者は絶対者であり、それらのことが同時に、というより端的に絶対的に同等であるという、父と子と聖霊の三位一体 (drei-Einigkeit) が成立するのである。シェリングにおける真の実在的なものとは、この三位一体論的に見られた個に帰着するのである。哲学とはかかる神聖なるものの本性の秘密 (Geheimnis) を露にする (zeigen) ことで、秘教的認識 (esoterische Erkenntnis) と呼ばれるのである。

ヘーゲルは『フィヒテとシェリングの哲学体系の相異』(一八〇一年)において、シェリングの絶対的同一性の立場に立つて、フィヒテを批判しているが、そこで同一性の解釈は、主観の側と客観の側との対立が、両者各々の純化 (reinen) の方向に於いて Abstraktion とつて働くと述べている。つまりヘーゲルにおいては、対立の否定面が注目されているのであるが、むしろシェリングでは、両者各々の純化の方向は、両者が絶対的無差別としての場において、絶対者と端的に一つだといふ絶対的同等性を基礎にして考えられていると言へる。このことは一切が量的に考えられて、質の面がなく、従つて否定性 (つまり個の個有性) が明

確に出て来ないという根本的弱点を、一般的には言い得て置か
らう。しかしこの端的に「である」という考え方は、シェリングにお
いて、只単に質に対する量的なものの対立を基にして考えられて
いたのかどうかも問題でもある(例えば映像と原像の対立等は量
的とは言い得ない)又ノーゲルのように対立を否定的に止揚して
次元を高次化し、その止揚における同一性を存在として考える媒
介の立場よりも、シェリングの先述した端的な対立は、その対立
が鋭く、然もそのままに絶対的な自己同一が成立している実存が
考えられるのである。然も又その実存が単に非合理的なるもの
強調としてではなく、先述したような理性とも呼ばれるような場
をもって考えられるのではないかと思う。しかしこれは後期哲学
との関わりの問題として、稿を改めて考えたい。

主要資料

- ★ ナキムト、Schellings Werke Dritter Band, (Heraus. von
Manfred Schröter)
- ★ 研究書。
- 1' G. W. F. Hegel: Differenz des Fichteschen und Schel-
ling'schen Systems der Philosophie. (Bibliothek. Band 62
a)
- 2' Fritz Meier: Die Idee der Transzendentalphilosophie
beim jungen Schelling. 1961.
- 3' Rudolf Hablützel: Dialektik und Einbildungskraft. F.
W. J. Schellings Lehre von der menschlichen Erkenntnis.
(Philosophische Forschungen. vol. 4, 1954)

- 4' Ernst Benz: Schelling, Werden und Wirken seines
Denkens. 1955.
- 5' Karl Jaspers: Schelling, Grösse und Verhängnis. 1955.
- 6' Dieter Jähmig: Schelling, Die Kunst in der Philosophie.
Erster Band. Zweiter Band. 1969.
- 7' Ernst Benz: Schellings theologische Geistesansichten. (Akade-
mie der Wissenschaften und der Literatur. 1955, NR. 3)
- 8' 藤田健治著『シェリング』(思想学説全書)一九六二年。
- 9' 西川富雄著『シェリング哲学の研究』一九六〇年。
- 10' 赤松元通著『シェリング研究』一九四八年。
- 11' 勝田守一著『シェリング』(西哲叢書第十七卷)一九三六
年。

- 12' 西谷啓治著『Das Reale と Das Ideale』(哲学研究、第九
卷、第十一冊)
- 13' 西谷啓治 Windelband: Geschichte der neueren Philoso-
phie. Zweiter Band. Kuno Fischer: Geschichte der neuern
Philosophie, Schellings Leben, Werke und Lehre.

求道に於ける難の問題

本 多 恵

三國わたいて連綿として伝統されてきた仏教の歴史とは、その